

キャリア教育の観点を取り入れた カリキュラムづくりのポイント

平成22年8月5日

国立教育政策研究所 生徒指導研究センター 総括研究官

文部科学省 初等中等教育局
児童生徒課 生徒指導調査官
教育課程課 教科調査官

藤田 晃之

キャリア教育と カリキュラムマネジメント

- カリキュラム・マネジメント抜きのキャリア教育はあり得ない
- もともと「上意下達」型の“教育課程”が存在しないキャリア教育
- 子どもたちの現状やニーズ、地域の状況や課題を踏まえて「学び」を作り上げていくしかない

ご参考：最新出版情報



650円(税込)
東京書籍



2100円(税込)
実業之日本社

新学習指導要領における キャリア教育の位置付け



学習指導要領改訂までの経緯



中央教育審議会答申における キャリア教育

● 学習指導要領改訂の基本的考え方(続き)

- 今回の学習指導要領改訂では、改正教育基本法等で示された教育の基本理念を踏まえるとともに、現在の子どもの課題への対応の観点から、
- ① 「生きる力」という理念の共有
 - ② 基礎的・基本的な知識・技能の習得
 - ③ 思考力・判断力・表現力等の育成
 - ④ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
 - ⑤ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
 - ⑥ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実
- がポイントであり、その中でも、特に、②を基盤とした③、⑤及び⑥が重要と考えた。(p.22)

中央教育審議会答申における キャリア教育

● 学習意欲の向上や学習習慣の確立のための四つの観点(抜粋)

○ 第一は、家庭学習も含めた学習習慣の確立に当たっては、特に小学校の低・中学年の時期が重要である。

第二は、「重点指導事項例」なども参考に、習熟度別・少人数指導や補充的な学習といったきめ細かい個に応じた指導などを必要に応じ外部人材の活用を図りつつ行うことにより、子どもたちがつまづきやすい内容をはじめ基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図る必要がある。分ける喜びは学習意欲につながる。

第三は、観察・実験やレポートの作成、論述など体験的な学習、知識・技能を活用する学習や勤労観・職業観を育てるためのキャリア教育¹⁾などを通じ、子どもたちが自らの将来について夢やあこがれをもったり、学ぶ意義を認識したりすることが必要である。

第四は、全国学力・学習状況調査等を通じて教育成果の様々な評価により、設置者等において、学習意欲や学習習慣に大きな課題を抱えている学校を把握し、これらの学校に対する支援に努める必要がある。

(pp.26-27)

中央教育審議会答申における キャリア教育

● 社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項

(キャリア教育)

○ 2. で示したとおり、「生きる力」という考え方は、社会において子どもたちに必要となる力をまず明確にし、そこから教育の在り方を改善するという視点を重視している。近年の産業・経済の構造的な変化や雇用の多様化・流動化等を背景として、就職・進学を問わず子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化している。このような変化の中で、将来子どもたちが直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくためには、子どもたち一人一人の勤労観・職業観を育てるキャリア教育を充実させる必要がある。

○ 他方、4. (1) で示したとおり、特に、非正規雇用者が増加するといった雇用環境の変化や「大学全入時代」が到来する中、子どもたちが将来に不安を感じたり、学校での学習に自分の将来との関係で意義が見出せずに、学習意欲が低下し、学習習慣が確立しないといった状況が見られる。さらに、勤労観・職業観の希薄化、フリーター志向の広まり、いわゆるニートと呼ばれる若者の存在が社会問題化している。

(続く)

「最底辺国」としての日本

● IEA・ The Trends in Mathematics and Science Study (TIMSS) 小学4年生・中学2年生対象



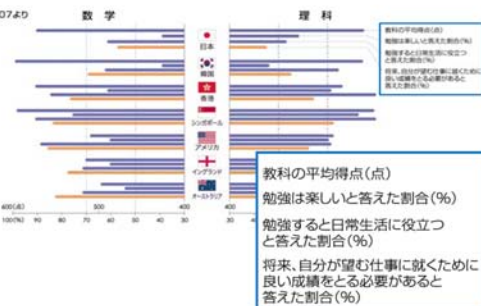
国際教育到達度評価学会 (IEA)

国際数学・理科教育調査

The Trends in Mathematics and Science Study (TIMSS)

TIMSS 2007が示すもの

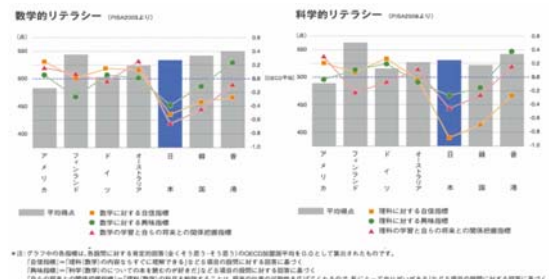
●TIMSS 2007より



PISA 2003・PISA 2006が示すもの

● OECD・生徒の学習到達度調査(PISA) 高校1年生対象

PISA - THE OECD PROGRAMME FOR INTERNATIONAL STUDENT ASSESSMENT



日本の教育の本当の危機

- 学びに対する興味関心の希薄さ
- 将来との関連性の見えないままでの学び
- 受験終了後に剥落する「知」の危険性

科学技術に関する意識調査

—2001年2～3月調査—
文部科学省 科学技術政策研究所

調査時期：平成13年2月23日（金）～3月23日（金）

調査対象

(1)設計標本数：3000 標本

（有効回収数 2146 人、有効回収率 71.5%）

(2)対象地域・対象者：全国18歳以上男女（69歳まで）

(3)抽出法：住民基本台帳からの層化2段無作為抽出法

調査方法：調査員による面接聴取（訪問面接法）

- (9)大陸は何万年もかけて移動しており、これからも移動するだろう…………… 1…………… 2…………… 3
- (10)現在の人類は原始的な動物種から進化したものである…………… 1…………… 2…………… 3
- (11)環境は肺がんをもたらす…………… 1…………… 2…………… 3
- (12)ごく初期の人類は恐竜と同時代に生きていた…………… 1…………… 2…………… 3
- (13)放射能に汚染された牛乳は濃縮されれば安全である…………… 1…………… 2…………… 3

Q20. 光と音はどちらが速いと思いますか。

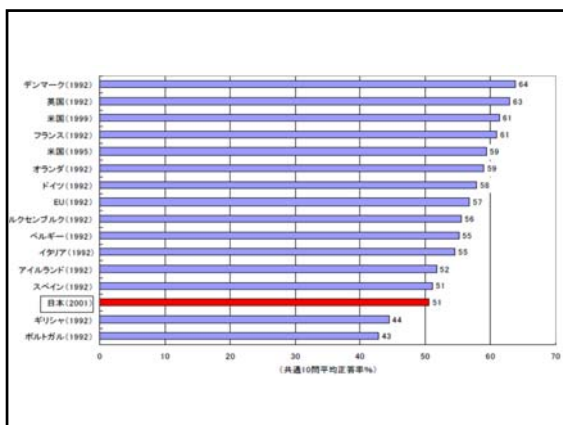
1 光 2 音 3 どちらも同じくらい 4 わからない

Q21. 地球が太陽の周りを回っていますか、太陽が地球の周りを回っていますか。

1 地球が太陽の周りを回っている 2 太陽が地球の周りを回っている 3 わからない

S Q. 地球が太陽の周りを回るのにどれくらいかかりますか。「1日」ですか、「1ヵ月」ですか、「1年」ですか。

1 1日 2 1ヵ月 3 1年 4 その他() 5 わからない



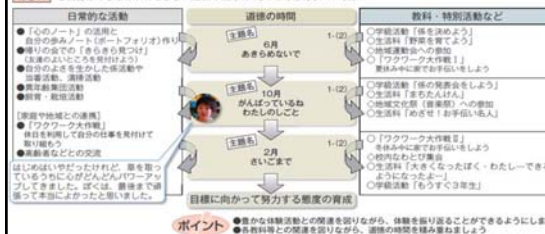
カリキュラムづくりのポイント —基礎論 小学校編—



小学校はキャリア教育実践の宝庫

展開例 ▶道徳の時間を要とした総合的な取組例(2年生)

ねらい ●自分がやらなければならない職業や仕事は、しっかりと行う 1-(2)



Q3 「キャリア教育は新しい教育活動ではない」と言われますが、これは「これまでどおりの教育でよい」ということですか？

A3 文部科学省による「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」（平成 18 年）には、「キャリア教育は、必ずしも新しい教育内容を導入しようとするものではない」と記されていますが、それに続けて、次のように指摘されていることを見落とすはなりません。

《キャリア教育は》教育活動の領域・単元の1つではなく、教育活動全体に働きかけていくという見方が大切です。小学校では、既存の教育活動のなかにキャリア教育と関連する内容が数多くあります。それらをキャリア教育の視点でとらえ直すことで、それぞれの活動の関連が明確になります。学級担任がすべての教科を見渡しやすいという小学校の利点を生かし、キャリア教育の視点を意識して取り組むことが大切です。

もちろん、学校や地域の特性、子どもたちの実情に応じて、新しい教育内容や活動を加え、キャリア教育をより豊かにする工夫もまた大切であることは言うまでもありません。けれども、まずは既存の教育活動をとらえ直し、その力を十分に生かすことが必要でしょう。

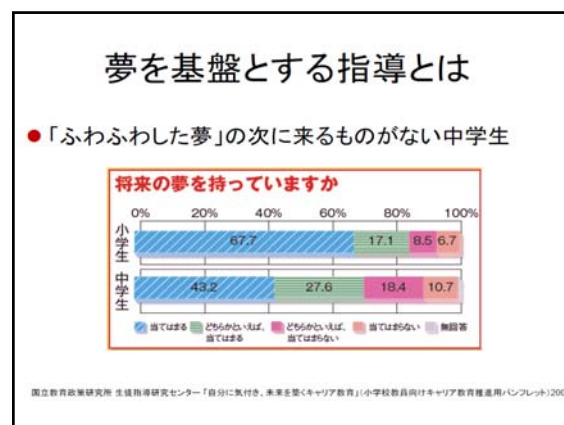
小学校では「早すぎる」か？

- 従来、根強かった誤解
- 小学校段階のキャリア教育を、児童に「将来なりたいもの」の特定を迫り、それに向かって着々と準備させる営みとして理解する
- ふわふわした、現実離れた「夢」を無責任に後押しすることになりかねない
- 無論、「夢」を持つこと自体は極めて重要
- 「夢」を大切にしながら、現実吟味の視点を持たせることが課題。

小学校キャリア教育の課題

小学校段階	中学校段階	高等学校段階
＜職業的（進路）発達段階＞		
進路の探索・選択にかかる基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択の時期	現実的探索・試行と社会的移行準備の時期
＜職業的（進路）発達課題＞		
自己及び他者への積極的関心の形成・発展	肯定的自己理解と自己有用感の獲得	自己理解の深化と自己受容
身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上	興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成	選択基準としての職業観・勤労観の確立
夢や希望、憧れの自己イメージの獲得	進路計画の立案と暫定的選択	将来設計の立案と社会的移行の準備
勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成	生き方や進路に関する現実的探索	進路の現実吟味と試行的参加

キャリア教育の推進に関する総合的調査協力者会議「報告書 児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」



夢を基盤とする指導とは

- 「なりたい」と「なれるわけない」の間にあるものが見えない子どもたち

■ プロ野球選手になりたい

- 野球が好き
- スポーツが好き
- プロスポーツ選手になりたい
- プロ野球が好き
-

■ パティシエになりたい

- お菓子づくりがすき
- 美しいものが好き
- 人を感動させたい
- ものを作り上げることに興味がある
-

低学年期の夢を基盤とする指導とは

- 《例》「プロ野球が好き」のケースを考える

● プロ野球を支える仕事

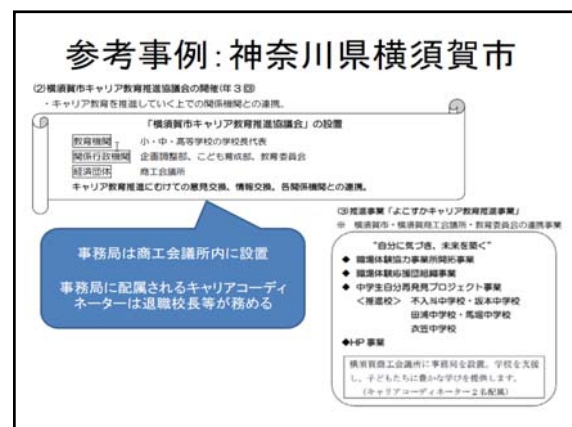
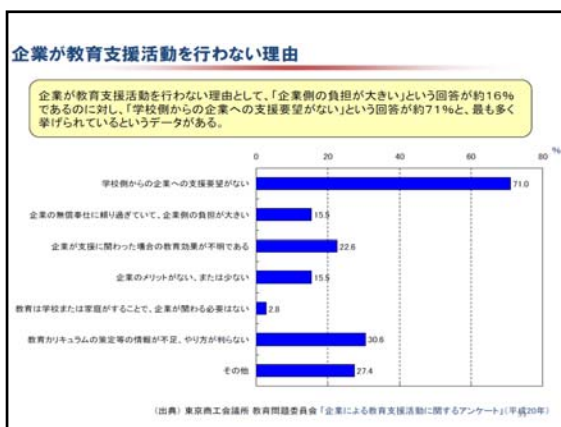
- ・ ユニフォームのデザイン
- ・ ユニフォーム専用生地の開発
- ・ 球団運営組織に携わる仕事
- ・ スタジアムの設計・建設
- ・ 芝の管理
- ・ イベントの企画
- ・

視野を広げる

仕事のネットワークの発見

将来自分も参加する社会の複雑さ・おもしろさを知る

「あこがれ」の多角化



平成20年度 文部科学省 学校支援地域本部事業

みんなで支える学校 みんなで育てる子ども

学校支援地域本部キックオフ！

全国各地でも開催されました 研究協議会レポート

- 平成20年度に産声を上げた「学校支援地域本部」
- 現在は成長過程にある制度＝これをどう育てるか？

中央教育審議会答申が求めるもの

- 新学習指導要領の柱の一つ：体験活動の充実

○ 子どもたちは、他者、社会、自然・環境の中での体験活動を通して、自分と向き合い、他者に共感することや社会の一員であることを実感することにより、思いやりの心や規範意識がはぐくまれる。また、自然の偉大さや美しさに出会ったり、文化・芸術に触れたり、広く物事への関心を高め、問題を発見したり、困難に挑戦し、他者との信頼関係を築いて共に物事を進めたりする喜びや充実感を体得することは、社会性や豊かな人間性、基礎的な体力や心身の健康、論理的思考力の基礎を形成するものである。

○ このように、親や教師以外の地域の大人や異年齢の子どもたちとの交流、集団宿泊活動や職場体験活動、奉仕体験活動、自然体験活動、文化芸術体験活動といった体験活動は、他者、社会、自然・環境との直接的なかわりという点で極めて重要である。これらの体験活動の充実には家庭や地域の果たす役割が大きいことを前提としつつも、核家族化や都市化の進行といった社会の変化やそれを背景とした家庭や地域の教育力の低下等を踏まえ、学校教育における体験活動の機会を確保し、充実することが求められている。

(続く)

中央教育審議会答申が求めるもの

- 新学習指導要領の柱の一つ：体験活動の充実(続き)

○ このため、現在、特別活動や総合的な学習の時間などにおいて行われている様々な体験活動の一層の充実を図ることが必要である。その際、体験活動をその場限りの活動で終わらせることなく、事前に体験活動を行うねらいや意義を子どもに十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることなどにより、意欲をもって活動できるようにするとともに、事後に感じたり気付いたりしたことを自己と対話しながら振り返り、文章でまとめたり、伝え合ったりすることなどにより他者と体験を共有し、広い認識につなげる必要がある。これらの活動は、国語をはじめとする言語の能力をはぐくむことにもつながるものである。

(p.61)

鍵を握る「事前の働きかけ」

- 職場という「宝の泉」に出かける生徒たち
 - 小さなヒシャクしかもたない者はヒシャク1杯分の水しか汲めない
- 「事前準備」と「事前指導」とを分けて考えよう
 - 職場体験・就業経験というイベントを大過なく遂行するための「事前準備」
 - 教育活動としてのねらいを明確にし、生徒の認識や視野の変容・成長を促す「事前指導」

鍵を握る「事前の働きかけ」

●【例】職場体験・就業体験の事前準備

- やらなければ実施自体が困難となること
 - ・協力事業所の確保、安全指導、服装指導、マナー指導、交通関連指導……
 - ・これだけでも、極めて大きな時間と苦労を要する
- 「教育としての中身」を深く方向づける働きかけは？
 - ・そもそも「確固たるねらい」や「キャリア教育全体の中での体験型学習の位置付け」は明確か？

鍵を握る「事前の働きかけ」

●職場体験学習の事前指導

- 省略しても「当日」が迎えられる 本来の事前指導
 - ・「一過性のイベント」「ああ楽しかった」で終わる危険性を強めてはいないか
- 事前指導が浅ければ、事後指導も“それなりに”にならざるを得ないし、その後の学習へのインパクトも小さい
 - ・多くの学校で見られる、発表会、文集、振り返りシート
 - ・その内容には踏み込まない(踏み込めない)指導
 - ・その子なりに感じたことを大切にするという建前論。実際には、何も働きかけない。何を学んだかは問わない。

カリキュラムづくりのポイント —基礎論 高等学校編—

高校インターンシップのねらい

Q4

高等学校におけるインターンシップ
〔就業体験活動〕は、中学校の職場体験活動と
どう違うのでしょうか？

A4

中学校における職場体験活動は、ある職業や仕事を暫定的な窓口として
から社会生活の現実を知ることで、高等学校におけるインターンシップは、
将来の可能性のある職業に関連する活動を試行的に体験することを通して
社会人・職業人への移行準備に役立てることが、それぞれ中心となる課題
となります。この点が両者の主な違いと言えます。

類い場合もあるでしょう。特に、中学校と高校に事業所(職場)の食品スーパー
等で体験する場合、生活が自らの成長や発達を促すまで、中学校代とほぼ同
じ視点から体験をとりとえられるような指導が求められる。例えば、就業
能力や仕事のやり方などについて、自らの職業意識の形成やコミュニケーション
能力などを通じて、職業意識の形成を促すことで、高校生活としての成長の契
機に結びつける指導が求められる。さらに、食品の衛生や安全に関する知識
(食料衛生法、経済的価値に関する知識(食料法)など、学校での学習と関連
付けることにより、中学校では基礎的な知識が身につく。さらに、食
品に直接関係する知識や技能を養成することができれば、中学校での職
場体験活動を通して、将来の職業に結びつけた工夫をすることで、自らの
職業意識や能力についてより深く学習する、意欲のある活動になります。

中学校における職場体験活動は、ある職業や仕事を暫定的な窓口としな
がら社会の現実を知ることで、高等学校におけるインターンシップは、
将来の可能性のある職業に関連する活動を試行的に体験することを通し
て社会人・職業人への移行準備に役立てることが、それぞれ中心となる課題
となります。この点が両者の主な違いと言えます。

高等学校向けパンフレットより

事例1
静岡県立
富山高等学校
普通科・理数科
創立135年
(県内最古)

進学校におけるキャリア教育の第一歩

富山高等学校のキャリア教育

小林祥子 教諭

●進学の意識
本校は進学校として、入学時から進学の意識を高く持つ生徒が多い。特に理数科は、進学意識が非常に高い。そのため、キャリア教育も進学意識と結びつけて行う必要がある。

●進学の意識
本校は進学校として、入学時から進学の意識を高く持つ生徒が多い。特に理数科は、進学意識が非常に高い。そのため、キャリア教育も進学意識と結びつけて行う必要がある。

●進学の意識
本校は進学校として、入学時から進学の意識を高く持つ生徒が多い。特に理数科は、進学意識が非常に高い。そのため、キャリア教育も進学意識と結びつけて行う必要がある。

中等教育資料

図1 インターンシップ参加者 / 就職先大学進学希望者人数

年度	参加者数	希望者数	割合
2016年度	8人	14人	42.8%
21年度	8人	12人	75.0%

図2 インターンシップ参加者 / 就職先大学進学希望者人数

図3 インターンシップ参加者 / 就職先大学進学希望者人数

図4 インターンシップ参加者 / 就職先大学進学希望者人数

図5 インターンシップ参加者 / 就職先大学進学希望者人数

WJH Project の決定

平成18年度に、本校の母体親睦会には、およそ30名をかけた WJH Project (資料p.4) を決定した。決定に至る経緯は次の通りである。

本校は、能代市という地方都市にあって、進学校の印象にあることから、進学者の質と量の拡大が望まれる状態に置かれている。数年前には同市内の大学への進学人数が2割に増加した期間があったが、昨年度から3割に回復している。この間、「すべては生徒の夢のため」という思いが、進学の夢を育て、進学の夢を育てるべく、授業を第一に考えて学力向上を目指して来た。そして、新学年、土曜学校、放課後補習、夏季補習(3年生は2013、14年生は10月)、冬季補習(夏季と同じ日程)、小論文指導、語学指導など、考えられるだけの選別指導もしてきた。また、種別人プロジェクトを立ち上げ、学部の別になる生徒を定期的に有ててきた。その甲斐あって、今年は東京大学中京部入生、一橋大学へも合格者を出せるようになった。こうした流れの中で、課題と感じられるものも出てきた。明確な目的意識をもって進学を志す生徒が少なくなくなったこと、自発的な学習習慣が身に付いていない生徒が少なくなくなったこと、それに教職員の指導や進路指導を受けるだけの指導では、これ以上進路に生徒を伸ばすことは限界があると感じるようになってきたこと、などである。

能代高等学校ウェブサイト <http://www.noshiro-h.akita-c.ed.jp/>

事例2

秋田県立能代高等学校

普通科・理数科

創立83年

「自他を知り、社会を知ることで、学びの意欲を高める指導方法の充実」を研究課題として①②③に示す調査研究を行う

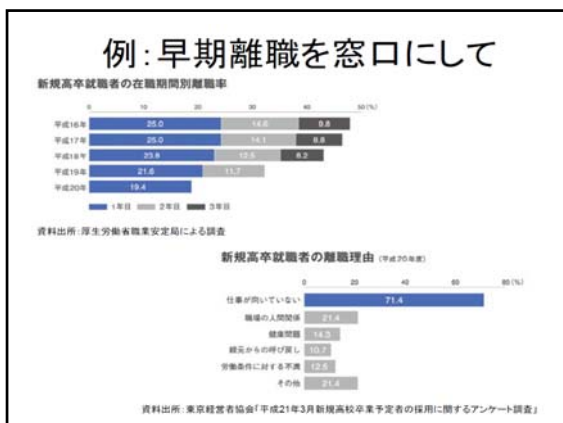
① キャリア教育の在り方に関する効果的な指導内容・指導方法の充実・改善

② キャリア教育の専門的知識を有する外部人材の活用及びその活用の在り方

③ その他

※誤解に基づく後ろ向きの姿勢

この大変な時期に、
将来を考えさせても意味がない。
一就きたい仕事に就ける者などほとんどいない時に、
何がキャリア教育だ！ー



職業への移行をリアルに伝える

- 上司が厳しい
- 職場での人間関係が……
- 些末な仕事しかやらせてもらえない

↓

- 果たして、次の職場ではこれらの問題は発生しないのか？

職業への移行をリアルに伝える

- リストラに遭った
- 退職を迫られている
- 会社が倒産した

↓

- これらのリスクから身を守るための知識、具体的支援やアドバイスを得るための手段についてどれほど指導されているか？

視点1

東京大学社会科学研究所
「希望学プロジェクト」

- 希望学プロジェクトでは、2005年5月にインターネットを用いたウェブ調査を実施し、20代から40代の約900名から回答を得た。そこでは調査項目として、小中学生の頃になりたかった職業と、その後の実現状況などをたずねた。それによると、何らかの具体的な職業希望の保有が、小学6年当時で71パーセント、中学3年当時で63パーセントにのぼっていたことがわかった。
- (しかし)希望していた職業に実際に就いた経験がある割合は、中学3年の希望については15パーセント、小学6年の希望に至っては8パーセントにすぎない。このように子どもの頃の職業希望は実現困難であり、希望を保有すること自体、徒勞であり、意味がないように思えるかもしれない。

東京大学社会科学研究所
「希望学プロジェクト」

- しかし、実際には希望を持つことが、将来の職業選択に大きな影響を与えている。先の調査では、これまでのやりがいのある仕事に就いた経験の有無をたずねた。すると、小学6年当時に希望する職業があった人々の場合、86パーセントがやりがいを経験したと答えているが、希望が無かった場合には、その割合は77パーセントにとどまっている。この結果は、仕事に関する希望の保有が、将来における就業のマッチングを社会的に改善する可能性を示唆している。
- 希望は、それが実現困難であればあるほど、失望に終わる可能性が高くなる。しかし、そんな失望経験のなかで、自らの適性を改めて認識し、社会における自分の位置付けなどを見直すことを通じて、結果的に社会のなかでより高い充足感を得られるのかもしれない。

<http://project.iss.u-tokyo.ac.jp/hope/>

では、具体的にどうするか
—各学校段階共通のステップ—

【ステップ1】
ゴールを設定する

※ゴール＝身につけさせたい力
※前提としての現状把握

ゴール設定をどうするか

- ゼロからの議論は、往々にして不毛に終わる
- 議論のきっかけとなり、議論の拡散をふせぐ「既存の枠」を活用しよう
 - ・ これまで＝4領域8能力
 - ・ これから＝基礎的・汎用的能力
- その際、これまで多くの学校が「はまってしまった「落とし穴」」に注意を払おう
 - ・ 4領域8能力は「例」＝金科玉条ではない
 - ・ 基礎的・汎用的能力＝例ではない。しかし、身につけさせる具体的な力は、学校で考えるべきもの

ゴール設定をどうするか

- これまで「落とし穴」にはまってしまっていた学校は、その思考回路から脱する努力を
 - 4領域8能力に基づく「落とし穴」の例
 - ・ 「〇〇能力」という言葉のうわべしか見ていない
 - ・ コンピュータを使う→即「情報活用能力」と備考欄に書く
 - ・ グループディスカッションをする→即「コミュニケーション能力」と備考欄に書く
 - ・ 実践の方法によっては、本来的な活動になったかもしれない（可能性の「芽」だけの羅列。羅列しただけでノルマ達成感がある。）
 - ・ 「金科玉条」の誤解とセットになって、キャリア教育の形骸化をまねく原因。（指導案の備考欄だけたくさんの文字でうまっているが、授業の中身はキャリア教育があってもなくても同じ。）

ゴール設定をどうするか

- いわゆる「4領域8能力」の枠を利用して、現状把握を丁寧に
- この作業をしないと、ゴール自体が「うわすべり」になる
 - ・ 想定例①：山間部の複式学級の小学校と都市部の大規模小学校＝人間関係を築く力の質的な差
 - ・ 想定例②：運動会・体育祭の当日の運営における子どものかかわり具合の違い＝課題を見つけ、達成する力の差
- 利用し得る既存データ、保護者や地域の声など、現状把握のための資料はたくさんある

ゴール設定をどうするか

- 文学的な美辞麗句でもOK
 - 全体計画の目標欄のスペースは限られている
- しかし、美辞麗句単独では、「あってもなくても同じ」結果を生みかねない
 - 例：生き生きと光り輝く子ども
 - どのような具体的な力が身についたことを想定して、「生き生きと光り輝く」と言っているのか。ここまでを全教員で共有しないと意味を持たない。
- 身につけさせるべき力の具体化は、後々の評価の際にも大いに役立つ。

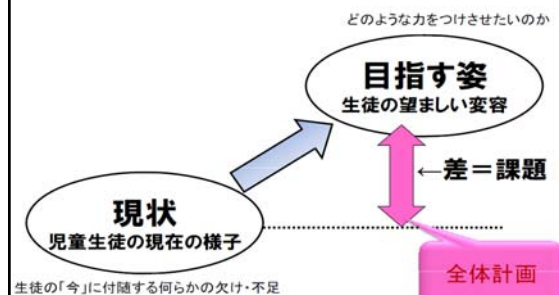
ゴール設定をどうするか

- ゴールは学校ごとに異なる部分があっても当然
- しかし、横の連携・調整、縦の連携・調整が全くと、しわ寄せが子どもたちに来てしまう
 - 少なくとも、中学校区内での情報交換・連絡調整の機会は、どこかで確保しよう
 - まずは既存の機会の有効活用
- 教育委員会のリーダーシップ機能、コーディネーション機能の本領発揮への大きな期待

【ステップ2】 全体計画を立てよう

※ゴールと現状との「差」を埋めるために、何をいつ、誰がやるのか

全体計画を立てよう



新学習指導要領 総則

- 【小学校】2(4) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること。(5) 各教科等の指導に当たっては、児童が学習課題や活動を選択したり、自らの将来について考えたりする機会を設けるなど工夫すること。(第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項)
- 【中学校】2(4) 生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと。(第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項)
- 【高等学校】5(4) 生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。(第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項)

全体計画を立てよう

- 新設校の準備段階なら、ゼロからの理想論に基づくことができる。しかし、大多数の学校では、今ある実践をベースにして、それらをより良くするために全体計画をたてる。
 - 強みはより強く。弱みは克服し改善する。
 - 今すぐできることに着手しつつ、数年先のビジョンも常にもつ。
- 管理職を含むチームでの取組が成功への鍵

全体計画を立てよう

- 「キャリア教育の全体計画」の形式だけを整えることは比較的やすい
 - インターネットで検索すれば、ほんの数秒でたくさん事例が手に入る。ほんの少し手を入れれば形は整う。
- ポイントは「先生方の納得感」を伴う計画立案
 - 人は多様な方法で納得する。納得させる方法も一つではない。
 - 中核となる人の「腕の見せ所」

63

全体計画を立てよう

- 全ての教育活動を通して実践するキャリア教育
 - しかし、キャリア教育の「断片」を数多く提供すれば良い、という単純なものではない
 - 断片にすらならない「備考欄への書き込みだけ」は論外
 - 「断片」を無数に提供しても、子どもたちに、それらを統合して全体像をとらえるだけの力はないことを常に念頭に置く
 - 提供する側が、意図的に体系を設定し、その体系を意識しつつ実践し、それを子どもたちに明示的に伝えてこそ、計画的・系統的なキャリア教育になる。

全体計画を立てよう

- まずは、手間や時間のかかっているプログラム、目玉となっているイベントを軸に考える
 - これって、何のためにやっているんだっけ？
 - ゴール(身につけさせたい力)に対して、どういう意味があるんだっけ？
 - それぞれの意味や意義は子どもたちにも「腹におちる」レベルまで伝えてあるか？ その視点を生かせるような事前・事後の働きかけは十分か？
 - なぜ、この時期にやっているんだっけ？
 - 時期や順序を変えるとより良くなるものはないかな？
 - これまで変えてこなかったのはなぜか？ 今もその理由は変わらないままか？

全体計画を立てよう

- 【例】中学校での職場体験活動
 - 京都への修学旅行の機会を活用した「1日職場体験」(A中学)と、地元での「5日間の職場体験」(B中学)とでは、得られる気付きも、身につく力も全く異なる
 - 前の学年や学期での学びは、その違いを想定したものとなっているか。後の学期や学年での学びは、それぞれの職場体験では身につけにくかった力を補完するようなものとなっているか。
 - 昨年と同じ形式の職場体験活動であったとすれば、それを継承したのはなぜか。

全体計画を立てよう

- 教科・科目での学びも生かせる全体計画に
- 指導案の備考欄に「〇〇能力」を羅列するだけでは、計画的な指導(体系化)はできない
 - 「ここぞ」と思う単元を活用し、年1回でも力を注いで実践して、関連が図れる教科・科目と積極的に連携しよう
 - 数は少なくとも、明確な教育意図に基づく熱意ある実践と、その体系化が必要

【ステップ3】 キャリア教育実践を評価しよう

※評価は一筋縄ではいかない
※しかし、評価なしのPDCAは考えられない
※まずは、できるところから

教育振興基本計画(平成20年7月1日閣議決定)



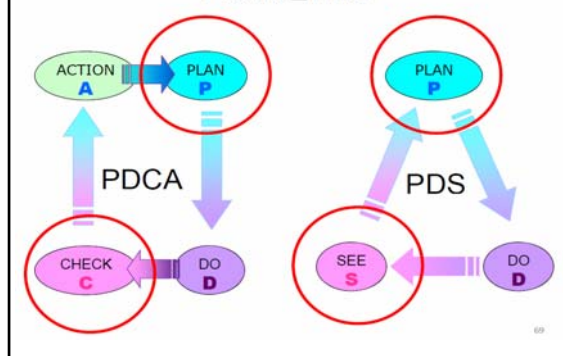
教育振興基本計画(平成20年7月1日閣議決定)

今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策

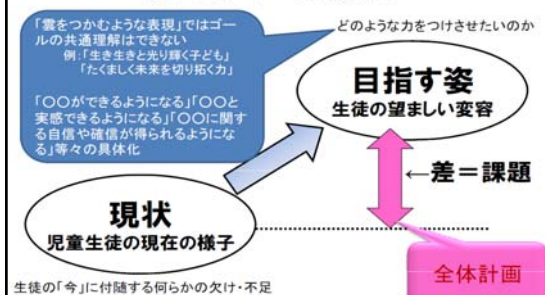
● 基本的考え方

- これまで教育施策においては、目標を明確に設定し、成果を客観的に検証し、そこで明らかになった課題等をフィードバックし、新たな取組に反映させるPDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクルの実践が必ずしも十分でなかった。今後は施策によって達成する成果(アウトカム)を指標とした評価方法へと改善を図っていく必要がある。こうした反省に立ち、今回の計画においては、各施策を通じてPDCAサイクルを重視し、より効率的で効果的な教育の実現を目指す必要がある。

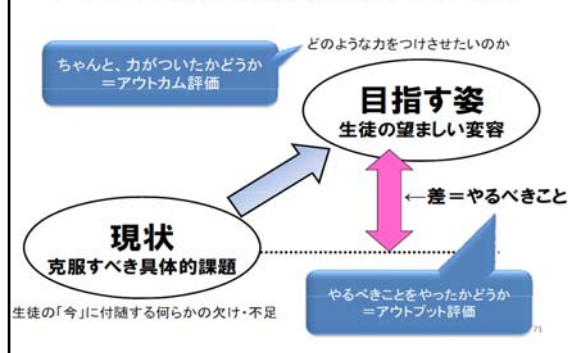
PDCAとPDS



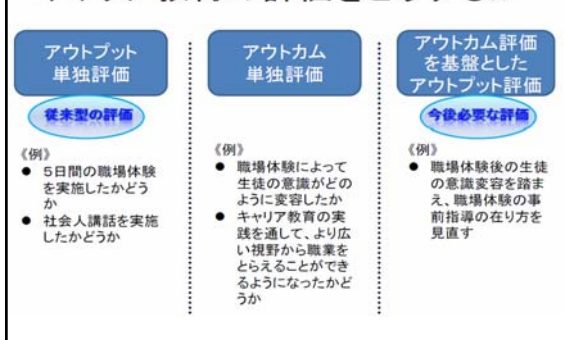
まずは、子どもの現状の把握から そして、ゴール設定へ



キャリア教育の評価をどうするか



キャリア教育の評価をどうするか



できることから、はじめよう

●【例】職場体験活動の実施後に行う「体験発表会」

- 発表を聴く側の生徒たちが記入している「評価シート」において、頻繁に見られる項目例
 - 発表者の声が大きく、はっきりしていたか
 - パワーポイントの表示画面がわかりやすく、見やすくなるよう工夫されていたか
 - これらの評価項目が、上位に来ている(重要項目扱い)となっている学校は、再検討が必要。
 - 無論、発表するのなら声は大きい方がいい。パワーポイントの画面もわかりやすい方がいい。

できることから、はじめよう

●【例】職場体験活動の実施後に行う「体験発表会」

- 評価の際、第一に優先されるべき視点
＝体験の「ねらい」「目標」にどれだけ迫ることができたか。
 - そもそも、「何を学ばせるために実施するのか」は明確か？ 学校全体で共有されているか？ 事業所や保護者とは共有されているか？

中央教育審議会答申が求めるもの

●体験活動の充実(再掲)

○ このため、現在、特別活動や総合的な学習の時間などにおいて行われている様々な体験活動の一層の充実を図ることが必要である。その際、体験活動をその場限りの活動で終わらせることなく、事前に体験活動を行うねらいや意義を子どもに十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることなどにより、意欲をもって活動できるようにするとともに、事後に感じたり気付いたりしたことを自己と対話しながら振り返り、文章でまとめたり、伝え合ったりすることなどにより他者と体験を共有し、広い認識につなげる必要がある。これらの活動は、国語をはじめとする言語の能力を高めることにもつながるものである。(p.61)

副次的課題

中心課題

※広い認識につなげるべきもの
＝まずは、ねらいとしていたもの

目指すべきゴールと評価

- 評価の基本＝ゴールにどれだけ近づいたか
 - その学校におけるキャリア教育のゴールが「ふんわり、雲をつかむような」状態であれば、評価は「ありきたりの項目で、適当にお茶を濁す」しかないし、評価の結果についても、「ふーん、そうなんだ」と受け流すことになる
 - 活動ごとに、「ねらうべきもの」を定めていなければ、評価をしても、結局は「ふーん、そうなんだ」に終わる

■最新動向■

「4領域8能力」論から 「基礎的・汎用的能力」論へ

ーキャリア教育・職業教育特別部会 第二次審議経過報告ー

[参考]進路指導の負の遺産

●進路指導の負の遺産

＝クセモノとしての「耳あたり」の良さ

- 進路指導は、紹介・斡旋であるというように長い間考えられてきた。最近では、学校が行う進路指導は単なる斡旋ではなく、教育そのものであると考えられるようになってきている。
- 進路指導は、個々の生徒に、自分の将来をどう生きることが喜びであるかを感得させなければならないし、生徒各自が納得できる人生の生き方を指導することが大切である。

『進路指導の手引ー個別指導編』

[参考]進路指導の負の遺産

- 生き方は「指導」できるか
 - たった3年(当然、されど3年)のつきあいの中で「生き方の指導」
 - 人生80年時代の生き方を感じさせることの実現可能性
 - 10代における「生き方の指導」とは
- 「雲をつかむようなきれいな事」のままでは、PDCAすら成立しない

大局的理念としての価値は明白
しかし、実践を導く具体的な目標としては、機能しないまま

「4領域8能力」論の登場

児童生徒が将来自立した社会人・職業人として生きていくために必要な能力や態度、資質

職業的(進路)発達にかかわる諸能力	
領域	能力説明
人間関係形成能力	【自己理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、共に生きることを大切に行動していく能力 【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	【情報収集・整理能力】 進路や職業に関する様々な情報を収集・整理することにも、必要の情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力 【職業理解能力】 様々な職業を通して、学校で学んだことを応用し、職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力
意思決定能力	【将来設計能力】 夢や希望を持って将来の生き方や生活を考えて、自分の進路を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。 【役割認識・認識能力】 役割や責任及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力 【計画実行能力】 目標とする将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立てて、実際の進路行動等で実行していく能力 【選択能力】 様々な選択について比較検討したり、進路を希望したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力 【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、進路実現に必要とするときに、希望する進路の実現に向け、自ら課題を設定してその解決に取り組む能力

キャリア教育の推進に関する総合調査研究協力者会議「報告書―児童生徒一人一人の進路観 職業観を育てるために―」(参考1)

本来は「たたき台」のはずだった

能力	説明	育成方法	評価方法
自己理解能力	自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、共に生きることを大切に行動していく能力	自己理解を深めるための活動、他者の多様な個性を理解するための活動	自己理解を深めるための活動、他者の多様な個性を理解するための活動
コミュニケーション能力	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力
情報活用能力	進路や職業に関する様々な情報を収集・整理することにも、必要の情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力	進路や職業に関する様々な情報を収集・整理することにも、必要の情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力	進路や職業に関する様々な情報を収集・整理することにも、必要の情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力
職業理解能力	様々な職業を通して、学校で学んだことを応用し、職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力	様々な職業を通して、学校で学んだことを応用し、職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力	様々な職業を通して、学校で学んだことを応用し、職業生活との関連や、今しなければならないことなどを理解していく能力

これまでに提言された各種能力の特徴と課題

「人間力」「社会人基礎力」「就職基礎能力」等の能力	
特徴	就職への移行期(主に若手社会人)という特定の時点に求められる基礎的な能力に焦点を当て、それをわかりやすく提示。など
課題	特定の時点以降のキャリア形成という点には十分な関心が払われていない。など
「キャリア発達にかかわる諸能力(例)」 ―いわゆる「4領域8能力」	
特徴	進路選択や進路決定を念頭に「育成」「発達」という観点で明確に提示されている。など
課題	この能力は「進路指導」を念頭に高等学校卒業までを想定しているため、産業界との共通言語となっていない。また、提示されている能力は例示にもかかわらず、現場では固定的にとらえている場合が多い。など

【補足】(平成22年9月5日) いわゆる「4領域8能力」の運用上の課題

- 本来「例」であつたはずの「4領域8能力」。
しかし、現実には.....
 - スタートラインである「目の前にいる児童・生徒の実態把握」すらない実践
 - 「8能力パズル」を無理矢理完成させようとするかに見える場合も
- 「〇〇能力」というコトバの一人歩き=本来目指されていたものから、かけ離れていく現実
 - 「情報活用能力」=コンピュータを使う授業の指導案(備考欄)には必ず登場
 - 「意思決定能力」=数学の解の求め方を決めるのもキャリア教育か????
 - 「コミュニケーション能力」=コトバを口にすれば、即、コミュニケーション能力の育成か????

学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かすための能力

「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」の構成



「基礎的・汎用的能力」とは何か？

基礎的・汎用的能力は、分野や職種にかかわらず、社会的・職業的に自立するために必要な基礎となる能力と整理

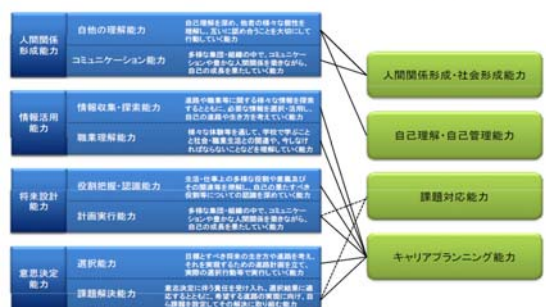
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
多様な物事や考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるように、自分の置かれている状況を客観的に捉え、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力	自分が「できること」「得意なと感じること」「したいこと」などについて、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた資質的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自分の思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学習しようとする力	仕事を進める上での様々な課題を整理・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力	「働くこと」を想う意義を理解し、自らが必要とする多様な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生活に際する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に行動してキャリアを形成していく力

- 社会人・職業人に必要とされる基礎的な能力と、学校教育で育成している能力との接点を確認し、これらの能力育成をキャリア教育の視点に取り込んでいくことは、学校と社会・職業との接続を考える上で意義
- 具体的内容については、「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れる観点から整理
- これらの能力は、包括的な能力概念であり、必要な要素をできるだけ分かりやすく提示する観点から整理

基礎的・汎用的能力に関する留意点

- 基礎的・汎用的能力の4つの能力は、それぞれが独立したのではなく、相互に関連・依存した関係
- このため、特に順序はなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない
- これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達段階によって異なる→「4領域8能力」も同じ前提で作られた
- 各学校では、これらの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体的な能力を設定し、工夫された教育を通じて達成する必要→「4領域8能力」も同じ前提で作られた
- その際、新しい学習指導要領を踏まえて育成

これまでの蓄積を生かした実践を



あわてずに、着実な移行を

- 「新たな課題がまた降って湧いた」は誤解
- これまでの蓄積を生かすことが何より重要
- これまでの誤解を脱し、実践のバージョンアップを図るチャンスとして生かす
 - ・ 4領域8能力も「例」
 - ・ 「基礎的・汎用的能力」も
 - ・ どのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるのかは、学校や地域の特色や子どもの発達段階によって異なる
 - ・ 各学校では、これらの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体的な能力を設定し、工夫された教育を通じて達成する